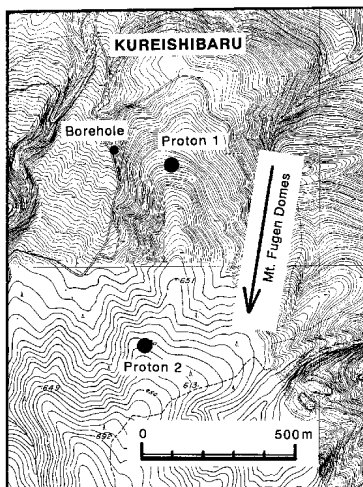
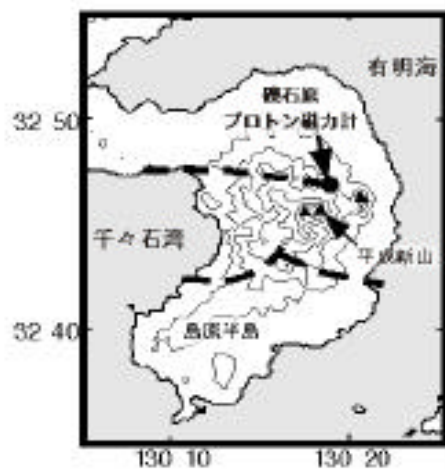
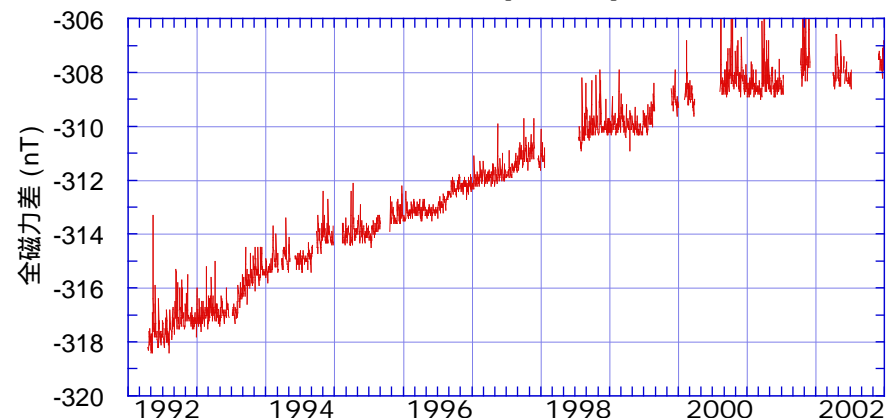


# 雲仙岳北麓における全磁力変化

九州大学地震火山観測研究センター

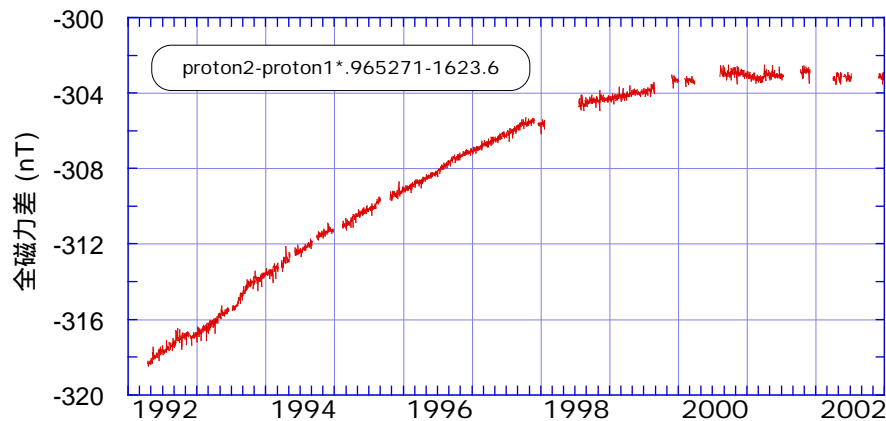


全磁力差 (単純差)



単純差では約1.2nT/yrの増加傾向が見られる．このうち両地点には1度05分の伏角の違いがあり，最近の九州地方の地磁気永年変化(垂直分力+30nT/yr)を考えると，約+0.4nT/yrは永年変化で説明できる．

全磁力差



2地点の全磁力差のばらつきが最小になるように1992年5,6月のデータを使用して係数を決定した．2000年後半より全磁力差が反転し，帯磁傾向となってきた．

全磁力

